

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	中等教育における和歌学習の研究（中学校編）：短歌の表現史の整理をもとに
Author(s)	武久, 康高
Citation	論叢 国語教育学, 18 : 40 - 50
Issue Date	2022-07-31
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/53667">10.15027/53667</a>
URL	<a href="https://doi.org/10.15027/53667">https://doi.org/10.15027/53667</a>
Right	
Relation	



# 中等教育における和歌学習の研究（中学校編）

## —短歌の表現史の整理をもとに—

武久 康高

### 1

本論文は以下のことを論じる。(1) 短歌の表現史の整理を通じて、和歌と近代以降の短歌との共通点、および相違点（＝和歌の表現特性）をまとめる [2-4 節]。(2) 中等教育の和歌学習を、〈和歌と短歌に共通する表現特性〉の理解に重点を置いた学習（中学校）と、〈和歌の表現特性〉の理解に重点を置いた学習（高等学校）の 2 段階に分けることを提案する [5 節]。(3) 〈和歌と短歌に共通する表現特性〉の理解に重点をおいた授業の実践例を示し、問題点を検討する [6-7 節]。

### 2

和歌とは本質的に「現在の自分の——つまり作者の——感覚や心情を表現するもの」であり、「その意味では」「抒情詩に分類されるべきもの」である（渡部 2020、p.11）。いわゆる叙景歌も「作者がそのように捉えたということにはほかならず」、そこでの表現は「選び抜かれ、作者の思いが託され、特有のアクセントを付された」ものと言える。

このように和歌も含めた短歌一般は、作者である私の「感覚や心情」を表現した〈一人称詩〉としての性格を負っている。そのため読者は、主語のない歌を読む際、「潜在的にどこかで〈一人称〉の主語を補填しよう」としてしまう。佐佐木幸綱は、こうした〈「私」という主語を補って読もう〉と読者に思わせる短歌の働きを〈詩型の強制力〉と呼んでいる（佐佐木 1983、p.28）。ここで佐佐木は、短歌という〈詩型〉自体が、作者自身の出来事や心情として歌を理解するよう読者に強制していると捉え、こうした〈詩型〉の干渉は、短歌を作る作者にも及んでいるとする（例えば「事実や実際の心情を歌に詠むべき」という思い込みなど）。そこから、短歌の表現史を捉える次のような視点を提案している。

千三百年に及ぶ短歌史をどう捉えるか、視点は無数にあるわけだが、〈詩型〉の干渉からの自由、具体的に言えば〈一人称詩〉としての短歌の中で作者がどう生身の自分から自由になり得るか、実験史として捉える視点は有効なその一つであるだろう（佐佐木 1983、p.30）。

本質的に短歌とは、作者の「感覚や心情を表現するもの」である。だがそんな〈一人称詩〉としての在り方を強制してくる〈詩型〉の干渉に対して、どんな対応が各時代でなされてきたのか。以上のような観点からの理解が、「千三百年に及ぶ短歌史」を捉える上で重要だと述べているのである。

例えば、近世以前の和歌について考えてみよう。鈴木日出男は、『万葉集』には「決まり文句のような類似語句」を取り込む歌が多く、「時代が降れば降るほど」「類歌性が濃密になってくる」こと、そしてそうした「万葉特有の類歌性」こそ「個々人の表現を実現させるための、依拠すべき新しい範型」だったと指摘している（鈴木 1990、p.16）。つまり、〈「決まり文句のような類似語句」の使用〉＝〈「集団にくみする」こと〉によって、かえって「和歌の抒情性としての個我が確保され」た

とするのである。そして『古今集』の時代になると、『万葉集』の時代のような類歌性は失われたが、「それに替るべき集団の言葉として、歌言葉が発達した」。歌言葉とは「様式化された美意識を基盤に発達した通念的な連想の言葉」のことであり、こうした「集団的な共通の歌言葉に関わることによって、かえって相容れることのできない固有の心情をかたどる」ことが可能となったのである（鈴木 1990、p.21）。さらに平安時代以降の題詠においては、〈型〉（題の本意によって規定された美意識の枠組み）の形成とそれに対して「歌人の実景実情が訂正を迫る」といった、〈型〉の形式とその破壊が「常に存在した」という（鈴木 1992、p.244）。

このように近世以前の和歌では、〈一人称詩〉としての在り方を強制する〈詩型〉の干渉があるなか、歌言葉、本意など〈共有化された表現の型や美意識〉の中に自身を投じることで、作者は「生ま身の自分」から距離をとる。そしてそうした〈表現の型や美意識〉に基づきイメージを膨らませる中で、そこからずれていく「固有の心情」が見いだされ、「和歌の抒情性としての個我が確保」されていった。佐佐木の観点に従うと、このように和歌の表現史を捉えることができる。

以上が近世以前の和歌における在り方だとすると、一方で「生ま身の〈作者〉があえてかならず作中に〈私〉として登場しようとしたのが、明治二十年代末にはじまった短歌革新運動であった」（佐佐木 1983、p.33）。つまり短歌革新運動とは、「本来的な〈詩型の強制力〉を加速させることで、近世までの中心であった題詠歌に代わる「〈自我の詩〉を実現した」運動だと言える。

しかし佐佐木は、こうした形で始動した近代短歌は「無限に自己を主張する」以外に機能しえなくなり、結局自己主張の具となってしまったこと、そしてその反省に立った前衛短歌運動以降では、「〈一人称〉でうたいつつ、作中の〈われ〉を直接〈作者〉と重なり合わせないため」の方法が模索された」と指摘している。以下、その一例として、佐佐木（1983）の試みについてまとめてみよう。

ここで佐佐木は、「〈短歌〉という〈反日常語〉を表現の場として選択すること」は「舞台に登るような」もので、「作歌とは、生ま身の私を作中に押し上げ〈私〉という俳優に変身させる試み」としている。そこでは「仮に、歌に出て来るような事実が作者の体験にあった」としても、「それをどう客観的に自立した〈私〉の体験」、つまり〈モチーフ〉として一首中に実現させるかが重要であり、そのためには、〈モチーフ〉に基づく素材の入れかえや表現の吟味が必要となってくること、そしてその〈モチーフ〉実現の過程で生まれた「作中の〈私〉」こそ、「生ま身の自分」ではないものの、自己内部に沈潜する心情や意識を何らかの形で映し出す存在とみることができるといっているのである。

このように佐佐木は、「〈一人称〉でうたいつつ、作中の〈われ〉を直接〈作者〉と重なり合わせないため」の方法例として、「〈モチーフ〉を具現化するための舞台」として表現の場を捉え、その舞台で作中の〈私〉を演じることで、作者は「生ま身の自分から自由」になれると指摘している。これは和歌とは異なる、〈詩型〉の干渉からの自由を求める方法論の一つと言えよう。

\*

以下、ここまでの検討をもとに短歌の表現史について整理する。

「短歌は、作者自身の現実生活における生活感情の表白」であり、「このことは、長い短歌史を通じてほっておけばそこへ帰帰する、『約束事』というよりは日本語および短歌定型のもたらす必然」である（藤平 2003、p.33）。こうした「〈詩型〉の干渉」に各時代の作者がどのように対応していったのかを明らかにすることが、短歌の表現史を捉える上で重要である。

近世以前の和歌とは、「まずみんなが一定の美意識を共有するところからはじまり、それに自身を投じることで自己確認ができるという世界であった」（鈴木 1997、p.44）。そこでは、〈何を、どのような観点で捉えて、どのように表現するか〉についての認識を「各自が個別の体験に基づいて持

つのではなく、固定化されたものとして共有すること」が目指され、それを具現化したのが『古今集』以降の歌言葉、歌枕、本意などであった（『万葉集』における類歌性はその萌芽といえる）。作者はこれらが示す「事物・事象への典型的な認識や感情の持ち方」に「自身を投じる」ことで「生ま身の自分」から距離を取りつつ、そうした「典型的な認識や感情の持ち方」に基づきイメージを膨らませていくことで、そこからずれる「固有の心情をかたどる」ことが可能となったのである。

一方、近現代の短歌では、叙上のような「典型的な認識や感情の持ち方」に基づく詠歌への反省から、「生ま身の自分」を作中に必ず登場させようとした。だが、それがかえって短歌を自己主張の具とする結果となった。そこでその回避法が模索されるなか、本稿では〈モチーフ〉に焦点をあてる佐佐木の論に注目した。そこでの作者は、〈モチーフ〉をもとに歌のイメージを膨らませ、「その〈モチーフ〉にふさわしい素材や表現とは何か」を吟味するなかで、自身も「生ま身の自分」とは異なる「作中の〈私〉」となる。このように一首中で、〈モチーフ〉に基づく「作中の〈私〉」を演じることで歌人たちは、和歌とは異なる「生ま身の自分から自由」になる方法を見いだしたのである。

### 3

前節のように短歌の表現史を整理してみると、和歌を詠む際の出発点となる「事物・事象への典型的な認識や感情の持ち方」とは、近現代短歌における〈モチーフ〉にあたるものと言える。〈モチーフ〉とは「創作の動機となる作者の内的衝動」（日本大百科全書）とも「書き手の『書きたいこと（もの）』そのもの（imidas）とも説明されるが、その〈モチーフ〉の中心が、「個人の心情、視点、個性を作歌の現場にどう参画させるか」を重視する近代短歌（現代短歌辞典）では「作者の内的衝動」となり、「古典主義に立つことが基本的な『約束事』であった和歌（藤平 2003、p.33）では、共同化された「事物・事象への認識や感情の持ち方」に基づく「内的衝動」となるのである。

例えば渡部泰明は、和歌を詠むとは〈作者が「和歌的世界の理想に導かれ」、その「儀礼的空間」（複数人間が、ある区切られた場所の中で、何らかのルールや約束事を共有しながら、特定の役割意識に基づいて行動する空間）の中で「作中の〈私〉」を演じること）であり、そこで「演じられている役どころ」こそ、和歌で表現される「心」とであると論じている（渡部 2009、p.8）。

つまり〈詩型〉の干渉への対応として、近現代の短歌では、〈作者の内的衝動である〈モチーフ〉〉を中心に舞台（作中世界）が設定され、その〈モチーフ〉の表現に向けて「作中の〈私〉」が演じられる）のであり、一方和歌では〈歌人たちの間で共有化された「事物・事象への認識や感情の持ち方」によって規定された内的衝動（〈モチーフ〉）を中心に「儀礼的空間」（作中世界）が設定され、その〈モチーフ〉の表現に向けて「作中の〈私〉」が演じられる）のである。以下、整理してみよう。

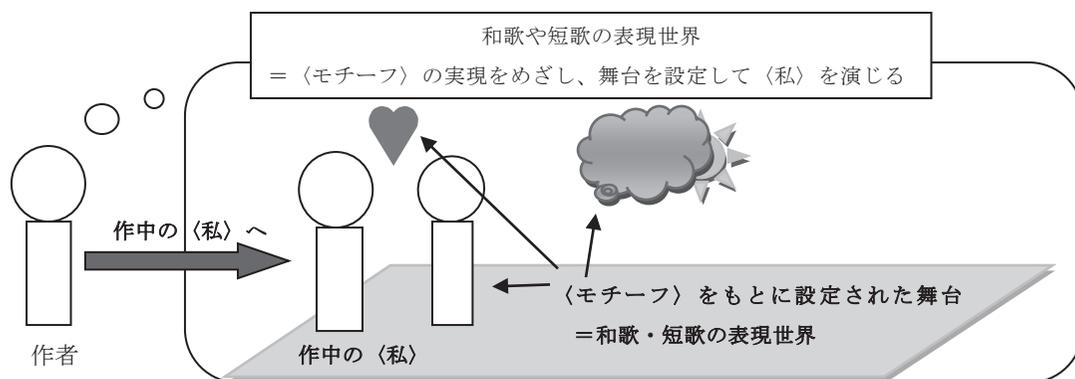
(a) 近世以前の和歌と近代以降の短歌は、〈モチーフ〉の実現にむけ、内省しつつ作品中の表現や「作中の〈私〉」を作り上げていくという点で共通している。

(b) 和歌の場合、その〈モチーフ〉が、短歌に比べ、歌人たちの間で共有化された「事物・事象への認識や感情の持ち方」によって、より強く規定されていた点で異なっている。

このうち (a) の表現行為は短歌全般に当てはまるものであるのに対し、(b) は主として近世以前の和歌にみられるものと言える（次ページに (a) を図示）。

ここで (a) は、短歌の表現史をもとに、和歌や短歌に共通する「表現生成の在り方」をまとめたものである。こうした「作中の〈私〉」の生成に焦点化した整理は、例えば同様の感覚を実感させられる歌の創作を伴う授業では有効かもしれない。だが次節では、授業での汎用性をより高めるため、

和歌や短歌に共通する「言葉の働き」やその読解という観点から (a) を整理し直したい。



○和歌の場合、舞台上で演じられるシチュエーションやテーマ、登場人物のキャラ、背景や小道具等の意味はある程度固定化しており、それを演者も観客も了解している。舞台の見どころは、そうした伝統的な様式を踏まえつつ、いかに演技や演出に工夫がなされているかである。

(【図1】和歌や短歌に共通する表現生成の在り方 (a))

#### 4

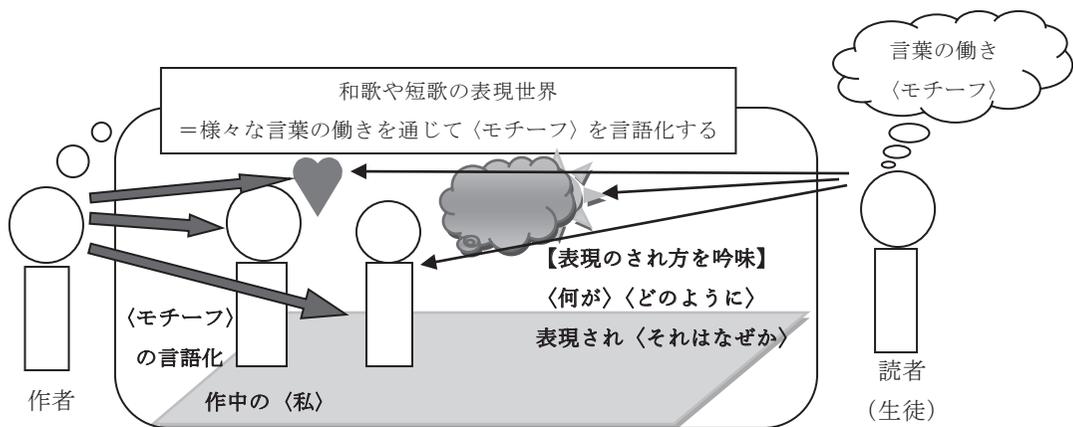
歌人である東直子は、短歌とは「事実を正確に伝えるためだけのもの」ではなく、その背後にある「いわく言い難い感情や感覚」、つまり〈モチーフ〉を「他者の心になげかける詩の形」であり、そのため「優れた作品は、意味内容だけではない深い余韻」を「読後に残」すと説明している（東2018、p.133）。そこから、「普通の文章（散文）」とは異なる「短歌」というジャンルの特性について、「（短歌とは—引用者注）出来事の報告をするために言葉を並べるのではなく、並べられた言葉の意味を超えて、導き出される広がり生まれる」、そんな「詩の形」であると指摘している。

例えば、「何か心を動かされたことが起ったとき、その心を象徴するように情景を切り取ってくる」、あるいはそうした「形のない」心を「触覚や視覚、聴覚などに具体的に置き換え」て、歌に詠んだとする。するとそれらの言葉の働きによって、一首のなかに、単なる情景の描写や出来事の報告を超えた余韻や意味の広がり生まれることがある。このように東は、短歌というジャンルの特徴について、事実を正確に伝達することではなく、そこでの言語化しがたい感情や感覚を、言葉の様々な働きを用いつつ、他者の心になげかけることと考えている。

こうした東の論を参考にすると、我々は和歌や短歌を読解する際、表現されている内容のみに着目するのではなく、そこで〈何が〉〈どのように〉表現され、〈それはなぜか（どんな効果がねらわれているのか）〉という観点から、一首における言葉の選択や用い方、効果について吟味する。そのことによって、並べられた言葉の意味を超えたより豊かな意味、例えば歌を生み出す「内的衝動」（〈モチーフ〉）としてある「いわく言い難い感情や感覚」を読み取っていくことが目指されるべきだと言える。以上のことを整理すると次のようになる。

(a') 近世以前の和歌と近代以降の短歌は、作者の抱く〈モチーフ〉について、様々な言葉の働きを通じて言語化し、他者の心になげかけるという点で共通している。

ここで読者は、一首中の言葉の働きを吟味することによって、投げかけられた〈モチーフ〉をより豊かに受け取ろうとする。こうした読者の働きまで入れて整理したのが、次ページの【図2】である。



○和歌の場合、〈モチーフ〉やその言語化の在り方は、共同化された「事物・事象への認識や感情の持ち方」に強く規定されている。もちろん短歌もそれらに規定されているが、和歌はそれらの規定に則ることが制度化している点で、短歌よりも強く規定されていると言える。

【図2】和歌や短歌に共通する表現読解の在り方 (a')

このように【図2】では、和歌や短歌を詠む際の特徴を〈様々な言葉の働きを用いて〈モチーフ〉を言語化すること〉とし、そこでの読者の働きを〈一首における言葉の選択や使い方、効果などを検討することで、描き出されている〈モチーフ〉を捉えること〉と整理した。中等教育での授業を前提としたとき、こうした〈事実を正確に伝えるだけではない「言葉の働き」〉を生徒に自覚化させることは、「言葉による見方・考え方」を働かせる授業という点でも重要だと考えられる。

## 5

ここまでの議論を再度まとめる。

- (a') 近世以前の和歌と近代以降の短歌は、作者の抱く〈モチーフ〉について、様々な言葉の働きを通じて言語化し、他者の心に投げかけるという点で共通している。
- (b) 和歌の場合、その〈モチーフ〉が、短歌に比べ、歌人たちの間で共有化された「事物・事象への認識や感情の持ち方」によって、より強く規定されていた点で異なっている。

以上の整理から、中等教育における和歌学習について、次のような段階を設けることを提案する。

- (1) 中学校の段階では、主として (a') に基づく学習を行う。そこでは、生徒がこれまで使ってきた読解方略をもとに、一首における言葉の働き（現代語と異なる古語の働き等含む）とそれによって言語化されている〈モチーフ〉を探り、その効果を考えたり、自らの創作に結びけたりする。そのことで、「様々な形で〈モチーフ〉を伝達する言葉の働き」について理解することを目的とする。
- (2) 高等学校では、クラスの状況に応じて (b) のような「和歌特有の表現方法」に焦点を当てた学習へと移行する。そこでは、先行テキスト（和歌など）から窺える「事物・事象への認識や感情の持ち方」との関係をもとに当該和歌の表現特性を探るなど、和歌特有の読解方略も活用した学習を行う。そのことで、(1) と同様の目的と共に、「文学テキストの表現特性や意義（革新性など）は、先行のテキストや観念等との関係を踏まえることで明らかになる」といった見方の獲得を目指す。

(1) と (2) を設定するにあたり参考にしたのは、ディシプリナリー・リテラシー (Disciplinary Literacy) と内容領域リテラシー (Content Area Literacy) に関する議論である。ここで内容領域リテラシーとは「与えられた学問分野の主題を学ぶために読み書きを使用する能力」のことであり、ここでは「初心者が学問的なテキストを理解するために用いるテクニック」の使用が重視される (Shanahan and Shanahan 2012, p.8)。そのため、様々なコンテンツを理解するために利用される読解方略等を用いて、その分野の内容を把握することが目的とされる。一方、ディシプリナリー・リテラシーとは、それぞれの学問分野内で共有されている読み方、書き方、考え方、推論の仕方のことであり、ここでは「専門家がその学問の仕事に従事するために用いる独自のツール」の使用が重視される (同 p.8)。むしろそれは「10代の生徒を専門家にしようとするものではなく」、「その分野の専門家に沿った方法で読み、書き、考えることができるよう」に支援することが求められる (Rainer and Moje 2012, p.73)。これは、分野ごとに「知」を生み出す方法や伝える方法が異なるため、それらを理解するためには、それぞれに応じたリテラシーの学習を中等教育でも行うべきだという考えに基づいている。

以上のことを (1) (2) に当てはめてみる。ここで (1) は、思考ツールの利用や比較など、生徒がこれまで使ってきたような一般的な方略を基盤として、そこから一首における言葉の選択や用い方、効果に気づかせ、その内容や〈モチーフ〉を読み取るといった、〈短歌全般の読解に関わるリテラシー〉について学習する授業である。なお、この段階における和歌独自の学習は、現代語と異なる古語への着目や簡単な時代状況の参照等による和歌の表現特性の把握などが考えられる。

一方、(2) は、〈先行テキスト (和歌など) との関係〉を考慮に入れつつ、一首における言葉の選択や用い方、効果を検討し、〈モチーフ〉を読み取るといった、〈和歌特有のリテラシー〉を学習する授業である。この段階においては、和歌を〈特定の誰かが、特定の歴史的な文脈の中で、特定の題や目的のもとに詠んだもの〉として、つまり文脈化して捉える。そのため一首中に描かれている〈モチーフ〉やそこでの言葉の働きについて、特に表現史的な文脈との関係、つまり先行する和歌表現との関わりを重視して検討することとなる。しかし授業では、そうした専門的な読解能力の育成を目指すのではなく、学習活動を通じて〈文学テキストの表現特性や意義 (革新性) は、先行のテキストや観念等との関係を踏まえることで明らかになる〉といった、他テキストの解釈にも活用可能な認識の獲得を最大の目的とする。これは、「コンピテンシー志向の授業にとって、文学テキストを先行のもの (Vorausgegangenes) に対する反応 (継続あるいは抵抗の意味で) として見なすことのできる能力の開発」が重要だとする Spinner (2006) の論を参考している (土山 2022, p.59)。

以上、中等学校における和歌学習について、ディシプリナリー・リテラシーと内容領域リテラシーという概念をもとに、それぞれ (1) (2) という段階を設定した。このうち本稿では、(1) に基づき構想した高知大学教育学部附属中学校 (3年生) での実践 (2021.10-11) について紹介する。

## 6

まずは授業の概要を説明する。光村図書「国語 3」の単元「いにしへの心を受け継ぐ」に載せられている和歌を教材として、「事実を正確に伝えるだけではない、様々な言葉の働きを探る」といった単元を設定した。授業者 (柳谷百香教諭) は全 4 時間で構想したが、最終的に 6 時間となった。

【1 時間目】はじめに単元目標を提示した。方法としては、歌人・東直子の言葉「短歌は、事実を正確に伝えるためだけのものではなく、事実の背後にあるいわく言い難い感情や感覚を、他者の心になげかける詩の形だと思えます」を示した上で、歌人はどのようにして自分の「いわく言い難

い感情や感覚」を表現しているのか、短歌をもとにいくつかの方法を確認した。そして、和歌を解釈するには、「この歌にはなぜこの表現が使われているのか」「そのことでどのような感情や感覚（心の揺れ）を読者に想像させ、届けようとしているのか」といった「言葉の働き」に目を向けることが重要であると指摘し、そうした言葉の働きを意識した和歌の鑑賞文を単元の最後に書くことを告げた。次に、和歌の音読と万葉・古今・新古今集の解説を行った後、「春過ぎて夏来たるらし白たへの衣干したり天の香具山」（万葉集・持統天皇）について、①表現技法、②どんな感情や感覚を伝えようとしているか、③そのためにどんな表現を行っているかを生徒と考えた。

【2～3 時間目】教科書の和歌それぞれ一首を各班で担当し、タブレットも活用しながらその表現技法（①）と、和歌の良さ（②③）をまとめ、発表させた。その後、練習の鑑賞文を書いた。

【4 時間目】まず、鑑賞文について解説した。そこでは、今回は二年時に既習の短歌との比較を通じて鑑賞文を書くこと、また鑑賞文の手順として、「両歌の共通点」と「共通点の中の違い」を見つけ、そこから和歌の良さを述べることを示した。次に、三首（A 万葉、B 古今、C 新古今）から一首選び、選んだ和歌の特徴について、Y チャートでの分析や短歌との比較によって検討した。具体的には、(1) A「君待つと我が恋ひ居れば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く」（額田王）と「なにとなく君に待たる心地して出でし花野の夕月夜かな」（与謝野晶子）、B「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを」（小野小町）と「観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日われには一生」（栗木京子）、C「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」（藤原定家）と「つばくらめ空飛びわれは水泳ぐ一つ夕焼けの色に染まりて」（馬場あき子）から1つ選択し、Y チャートを用いて、教師が定めた3つの観点から歌中の各表現に対するイメージや解釈を深め、それを和歌と短歌とで比較した。(2) Y チャートでの読み深めや両歌の共通点・相違点等を踏まえ、和歌の〈モチーフ〉（作者の心の揺れ）やそこでの言葉の働きの特徴について考えた。

【5 時間目】同じ和歌を選んだ生徒同士で意見を交流した後、鑑賞文を書いた。

【6 時間目】各班で鑑賞文を発表しあい、自分の鑑賞文について振り返りを行った。

このように本単元では、「様々な言葉の働きを通じて〈モチーフ〉（授業者は「作者の心の揺れ」と説明）を言語化する在り方に目を向け、自分が選んだ和歌の良さを伝えること」を目的とし、その方法として「Y チャートを活用した既習の短歌との比較を行った」とまとめることができる。

次に教材について説明する。本単元では、鑑賞文を書く和歌を前掲のABCから選ぶこととした。以下、ABCそれぞれの組み合わせにした理由を述べる。なお本単元の目的は、自分の「いわく言い難い感情や感覚」（〈モチーフ〉）を作者がどのように言語化しているのかを探ることである。そのため、観点を絞ってイメージをふくらませる作業が効果的だと考え、Y チャートを利用した（そこの各観点は教師が定めたため、その観点についても《》以下に挙げておく）。

#### 《組み合わせの理由と Y チャートの観点》

①【〈モチーフ〉が類似する組み合わせ：B】「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを」（小野小町）と「観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日われには一生」（栗木京子）とは〈ほんのひと時、秘めた恋心を抱く相手と一緒にいられた時の思い〉を詠んでいる点で類似している。つまりここでは同じような〈モチーフ〉が詠まれているのだが、そのシチュエーションを小町歌では「夢」、栗木歌では「観覧車」に設定するなど、言語化の在り方が異なっている。そのため一首を通じて表現しえている感情や感覚は少し異なっていると言え、その両歌を比較することで、〈モチーフ〉を言語化する際の言葉の働きや、その言葉（シチュエーション）にせざるを得ない時代状況の違いが理解しやすくなると考えられる。よって教材として取り上げた。

《Yチャートの観点》小町歌：①「夢」②状況③心情、栗木歌：①「観覧車」②状況③心情

②【一首の中心的な表現が類似する組み合わせ：C】「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」（藤原定家）と「つばくらめ空飛びわれは水泳ぐ一つ夕焼けの色に染まりて」（馬場あき子）とは、「夕暮／夕焼け」が一首の中心的な表現である点で類似している。しかし、〈花・紅葉が不在のなかでの、「浦の苫屋の秋の夕暮」がもたらすイメージと、〈空飛ぶ「つばめ」と水中を泳ぐ「われ」を「一つ」の色に染めている「夕焼け」がもたらすイメージとでは大きく異なっている。つまりここでの「夕暮／夕焼け」は、単なる「日没」という事実を伝えるのではなく、作者の〈モチーフ〉の言語化に寄与する中心的な役割が担わされていると考えられる。よって教材として取り上げた。

《Yチャートの観点》定家歌：①色②視点③登場するもの・イメージ、馬場歌：①色②視点③登場するもの・イメージ

③【状況設定や描写が対照的な組み合わせ：A】「君待つと我が恋ひ居れば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く」（額田王）と「なにとなく君に待たるる心地して出でし花野の夕月夜かな」（与謝野晶子）とは、「君」「待つ」という共通の言葉がありながら、額田王歌が〈男の訪れを待つ女〉の歌であるのに対し、与謝野歌は〈男が待っていると思ひ、逢いに出る女〉の歌といった、時代状況の違いが読み取れる歌となっている。また、両歌とも自然描写があるが、それぞれ「秋の風」、「花野の夕月夜」といった対照的な印象を抱かせる描写になっている。このように〈恋人の訪れを待つ〉という共通性を持ちながらも、対照的な行動や自然が描かれていることから教材とした。

《Yチャートの観点》小町歌：①「君待つと我が恋ひ居る」②「秋の風」③動くもの・作者の気持ち、与謝野歌：①「君に待たるる気持ち」②「花野の夕月夜」③動くもの・作者の気持ち  
以上のような理由から、本単元ではABCそれぞれの組み合わせを教材とした。

## 7

本節では、生徒たちが書いた鑑賞文について取り上げる。授業を行ったクラスにおいて、Aを選んだ生徒は3人、Bは10人、Cは14人であった。以下、前述の目標をもとに作成した評価基準に従い、生徒の鑑賞文を分類する。紙幅の関係から、具体例はCの鑑賞文のみを挙げる

5	一首における言葉の選択や用い方を吟味することで各表現の効果を的確に捉え、より豊かに一首全体の〈モチーフ〉を読み取っている
	【例】（前略—ここまで両歌の共通点と相違点を詳しく説明する）これを元にこの和歌の魅力について考えていく。／この和歌と短歌の根本的な違いはそれぞれが表すイメージだ。和歌は哀しく寂しい歌だが、短歌は明るくすがすがしい歌だ。この和歌の良さはそんな哀しくさびしい風景を、使う言葉や展開の仕方によって全体で表現していることだ。例えば、生き物がないことについて考えてみよう。生き物がないことで生き物がある短歌と比べて、より何もないさびしさが強まっていると思う。歌から生命が感じられないことでより「何もない」ということが際立っていると感じる。さらに、太陽が一日の終わりに沈んでいこうとしている様子を「夕暮」と表現していることもそうだ。「夕焼け」ではなく「夕暮」と表現することで太陽が「暮れていく」という言葉がどこかさびしいような哀しい印象を与えると感じた。他にも、この歌のおもしろさでもある前半の「見わたせば花も紅葉もなかりけり」にもある。ただないだけなら書かなくても良かったものをわざわざ書き、しかもあえて花や紅葉という美しいものを出した後に「なかりけり」と打ち消すことで、さらに「何もない」ということが引き立っている。／このように、この歌にはたくさんの魅力がある。この魅力によって、この歌が表す風景を読み手の頭へ鮮やかに思いおこさせている。言葉づかいや展開の仕方でも読み手に同じ風景を見せてくれる素敵な歌である。
4	一首における言葉の選択や用い方を吟味することで各表現の効果を捉え、それを一首全体の〈モチーフ〉

	と結びつけて読解している
	【例】和歌も短歌も日没に詠まれた絵画的な歌だ。同じ時間帯を「見わたせば」では「秋の夕暮れ」とどこか物悲しく、「つばくらめ」では「一つの夕焼けの色」と一面にオレンジ色の躍動感が広がる。／短歌では、飛ぶ「つばくらめ」と泳ぐ「われ」の動きが対比され、空間も空と水中の対比が効果的に大きく詠まれている。和歌では、花や紅葉もなく華やかなものはないなか、漁夫の家だけがぼつんとある。その光景に夕暮れがさしている。生物など動くものがなく躍動感はないが、さびしい漁夫の家に夕暮れがさすという奥深い静かな美しさがあり、心が落ち着く歌である。／「つばくらめ」と「われ」が共に夕日色に染まり一つになった景色は幸福感に満たされる。和歌では美しい存在である「花も紅葉も」を否定し、秋の夕暮れの奥深い静かな風情を見だしそれを歌に詠む感覚は、新しい価値を見つけたと思う。
3	一首における言葉の選択や用い方に注目し、各表現の効果について言及している
	【例】この和歌は藤原定家が詠んだ和歌である。詠まれた状況は、辺りには花も紅葉も何一つない海辺の粗末な小屋の辺りの秋の夕暮れを見ているという状況である。参考にした短歌は馬場あき子さんが書いた短歌である。この歌はつばめが空を飛びわれは水を泳いでいる。別々なことをしているが、夕焼けという同じ物に染まっているため、同じ世界に生きているすばらしさを感じている歌である。／この二つには共通点と相違点がある。共通点はどちらも夕日が出てくる場所である。夕日が歌のそれぞれのよさを引き立てている。和歌は夕暮れでわびしい雰囲気。短歌は夕焼けで同じものに染まっているため生きている感じを表している。相違点は夕焼け、夕暮れでどちらも夕方に太陽が沈む前だが、夕暮だと暗いイメージのためわびしい雰囲気をより引き立てている。夕焼けは明るいイメージのため、生きていることのすばらしさがよく感じられる。同じ夕日でも表現しだいでイメージが変わる。それが和歌のよさなのである。
2	表現内容の説明や、共通点・相違点の指摘にとどまっている
	【例】「見わたせば…」という和歌では、今までの美しい言葉でうたい上げる歌とはちがいが「花も紅葉も」否定しています。それを歌に詠みこむ感覚は当時としては新しいものでした。参考歌では、対比により非常に美しい印象を読み手に与えます。／2つの歌を比較すると、それぞれに共通点や相違点があります。共通点としては、和歌には「夕暮れ」、短歌には「夕焼け」と、2つともに秋を感じさせる言葉が使われているということです。／相違点としては、短歌では美しい情景を読み手に与えていますが、和歌では美しい情景を否定しています。また、短歌では自分が海に入っていて体験していることですが、和歌では自分は遠くから見ているので体験していないことがあります。
1	解釈が間違っているなど
	【例】これを作った人は日常的に景色を見てこの日だけ特別にきれいに見えて、周りの花やったり紅葉が夕焼けに照らされてとてもきれいと思ったので、その場でこの和歌を書いたと思った。／短歌は筆者が川とかで泳いでいて、夕焼けが出てきてもう帰ろうとしていたときに、つばめが飛んでいてそのつばめが夕焼けに照らされてそれがきれいと感じた。／共通点は夕焼けのことについて筆者は語っていることで、相違点は和歌は花や紅葉などたくさんものを見て書いてるけど短歌はつばめだけと思った。

ここでは「一首における言葉の選択や用い方」、つまり〈どのように表現されているか〉に目を向け、その表現効果に言及しているものを【3】とした。そして、それらを〈モチーフ〉の理解に結びつけているものを【4】、表現効果の指摘が的確で、より豊かに〈モチーフ〉の理解を行っているものを【5】とした。

【表 1】

	5	4	3	2	1	計
A	0	1	1	1	0	3
B	0	3	3	4	0	10
C	1	2	4	6	1	14
計	1	6	8	11	1	27

一方、表現されている内容の説明や和歌と短歌の共通点・相違点の指摘レベルにとどまっているものを【2】、解釈が明らかに誤っているものなどを【1】とした。人数の内訳はそれぞれ、【5】1人、【4】6人、【3】8人、【2】11人、【1】1人である。

今回の単元は、言葉の働きを意識して和歌の鑑賞文を書くことが目的である。そこからすると、4割以上の生徒がその水準（【3】）に達していない今回の授業には何らかの問題があったと言える。第5節で述べたように、本単元は、〈Yチャートの利用〉や〈短歌との比較〉といった既習の方法を

用いつつ、そこから〈一首における言葉の選択や使い方に着目し、その効果を探る〉といった〈短歌特有のリテラシー〉の学習へと繋げるものであった。しかしこの結果からは、そうした両学習の接続があまりうまくいかなかったと考えざるを得ない。このことは、両歌の共通点・相違点を書くだけで終わってしまう生徒や、たとえ一首における言葉の用い方に注目できたとしても、そこから一首の表現がもたらす効果についてうまく説明できない生徒が多かったことから明らかである。

では、どのようにしたら改善できるだろうか。一案としては、今回は「鑑賞文の手引き」というプリントにおいて、教師の鑑賞文例と共に、古語も含めた言葉の働きに注目する方法を例示したが（論文末《資料》参照）、それだけではなく、「和歌と短歌の表現には、共通点の中になぜこうした違いがあるのだろうか」「違うことによってどんな効果が生まれているのだろうか」などの問いを生徒に抱かせる工夫がもっと必要だったと考える。特に今回は、以上の問いかけが有効なペア教材を選んでいるため（Bは〈モチーフ〉は類似しているのに表現（「夢」「観覧車」）が違う、Cは中心的な表現は類似しているがもたらすイメージが違う（「夕暮」「夕焼け」）、Aは〈恋人の訪れを待つ〉という共通性を持ちながらも自然描写が対照的（「秋の風」「花野の夕月夜」）など）、Yチャートを用いた話し合いの際に叙上の問いを投げかけてもよかったのかもしれない。こうしたことは今後の実践に活かしていきたい。

## 8

以上、本稿では、提案した授業案のうち中学校段階にあたる（1）を実践し、多くの問題点が見つかった。今後の課題は、①（1）の実践を見直すこと、特に問いの工夫やどんな短歌と比較する（どんな既有知識を解釈に利用すること）ことで鑑賞が深まるのか検討すること、②（1）の「鑑賞文」を「短歌の創作」にすると生徒の理解はどうか検討すること、③高等学校段階にあたる（2）を実践した上で、そこで生じる問題点を検討することが挙げられる。これらについては後稿を期したい。

### 【文献】

佐佐木幸綱（1983）『作歌の現場』角川書店

鈴木健一（1992）「歌題の近世的展開」和歌文学会編『論集 〈題〉の和歌空間』笠間書院

鈴木健一（1997）「歌枕を研究しよう」小林幸夫ら編『【うた】をよむ—三十一字の詩学—』三省堂

鈴木日出男（1990）『古代和歌史論』東京大学出版会

土山和久（2022）「【翻訳】Kaspar H.Spinner 著 文学に関わる学習（Literarisches Lernen:2006）」『国語教育学研究誌』32

東直子（2018）『短歌の不思議』ふらんす堂

藤平春男（2003）『藤平春男著作集 第5巻』笠間書院

渡部泰明（2009）『和歌とは何か』岩波書店

渡部泰明（2020）『和歌史 なぜ千年を超えて続いたか』角川書店

Rainer, E., and Moje, E. (2012) Extending the Conversation Building Insider Knowledge: Teaching Students to Read, Write, and Think within ELA and across the Disciplines *English Education*, 45 (1)

Shanahan, T., and Shanahan, C. (2012) What Is Disciplinary Literacy and Why Does It Matter? *Topics in Language Disorders*, 32

（高知大学）

### 《資料》授業で使った「鑑賞文の手引き」

鑑賞文とは、みなさんが読み取った歌の良さを分かりやすく説明する文章のことです。今回の授業では、2年生の時に勉強した短歌との比較を通じて和歌の良さを理解し、鑑賞文を書いてもらいたいと思います。

【例】「父母が」歌（防人歌）の鑑賞文を書きなさい。その際、現代短歌である「思い出の」歌（俵万智）との比較を行うこと。

父母が頭かき撫で幸くあれて言ひし言葉ぜ忘れかねつる 防人歌  
《参考》 思い出の一つのようでそのままにしておく麦わら帽子のへこみ 俵万智

### 【手順】

- ① まず、「父母が」歌（防人歌）と「思い出の」歌（俵万智）との共通点を考えます。  
《注目すること》歌われている場面や状況、使われている言葉などに共通点はないでしょうか。  
[共通点の例] ある言葉（「幸くあれ」）や物（「麦わら帽子のへこみ」）を通して、忘れられない出来事（「父母との別れ」や「夏の思い出」）に対する作者の思いが表現されていること。
- ② 共通点が見つかったら、その共通点のなかでの違いを探していきます。  
「思い出の」歌（俵万智）では、作者が忘れられない思い出の内容については描かれていません。その代わりに、「麦わら帽子のへこみ」という「物の様子」を通じて、その思い出について、またその思い出に対する作者の感情について、読者にイメージさせようとしています。  
一方で、「父母が」歌（防人歌）では（「頭かき撫で」、「幸くあれ」と言った）という父母の具体的な言動が描かれています。  
以上の違いから、次のことに注目してみたいと思います。
  - (1) なぜ「思い出の」歌のように、楽しかった日々を思い出させるような物（例「麦わら帽子のへこみ」）を用いるのではなく、別れ際の両親の言動（「頭かき撫で」「幸くあれ」）を描いたのでしょうか。
  - (2) その行動が「撫で」ではなく「かき撫で」であること、また言葉が「早く戻って来い」などではなく「幸くあれ」であること、さらに和歌中の「忘れかね」（忘れることができない）といった表現などから、作者は父母の、また父母に対する自分のどんな感情を伝えようとしていると言えるでしょうか。
- ③ ①②を考えたうえで、「父母が」歌の良さを自分の言葉でまとめましょう。